

# 6

## 馬を障害のある子どもたちの教育に活かす —「治療的乗馬」の世界—

最近、「乗馬療法」や「乗馬セラピー」ということばをよく聞きます。新聞やテレビなどでも随分取り上げられるようになってきました。それはどのようなものなのでしょうか。

### 1. 「乗馬療法」って何でしょう



最近、テレビや新聞などで「乗馬療法」や「乗馬セラピー」ということばを良く聞きます。国立特殊教育総合研究所が平成14年に行った全国調査によると、盲・聾・養護学校全体の約58%が、障害のある子どもに対する「馬を用いた指導」や「乗馬療法」という領域について聞いたことがあると答えています。そして、「馬とふれあったり乗る」機会を提供している学校は約28%となっています。では、我が国で現在「乗馬療法」や「乗馬セラピー」と呼ばれているものは何でしょうか。この領域は外国では

<障害者乗馬> Riding for the Disabled

あるいは

<治療的乗馬> Therapeutic Riding

と呼ばれています。いずれも、馬を用いて障害のある人々等の

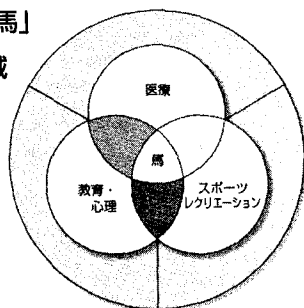
(1) 治療や訓練、(2) 教育や心理対応

(3) スポーツやレクリエーション

を行うことをその内容としています。

#### ●「治療的乗馬」

三つの領域



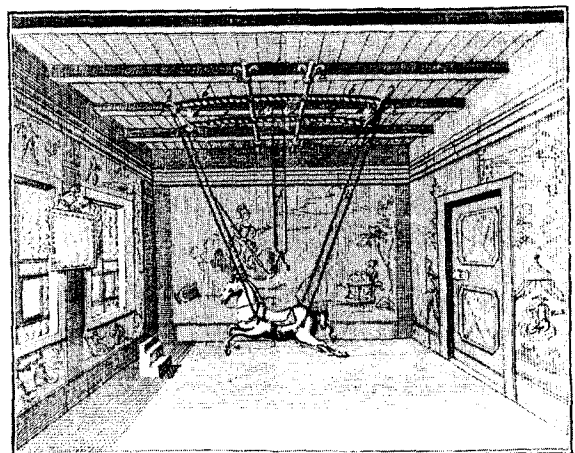
Strauss, I. (2000) を改訂

### 2. 馬を用いた治療的アプローチのはじまり



西洋社会では、馬という動物についてずっと以前から「馬といることによって心が安らぐ」とか「痛みが軽減する」といった心理的な側面が指摘されていました。

18世紀になると、馬に乗ることが身体機能の活性化に非常に効果があるとされ、運動的な側面やリハビリテーションの側面からの効果が注目されるようになります。18世紀には既に「乗馬を通じての健康作り」と題した書籍がドイツで出版されています。また、19世紀末にはスウェーデンで治療目的に機械仕掛けの馬が作られています。20世紀初頭には治療を目的とした馬の活用がウィーン大学医学部講座で取り上げ

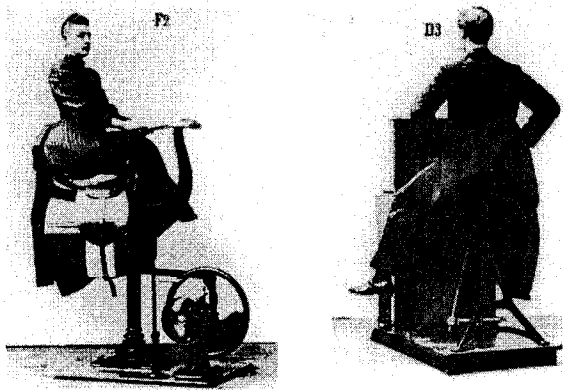


18世紀の図版に見られる「乗馬装置」

-Gesundheit durch Reiten. Leipzig, 1735から-

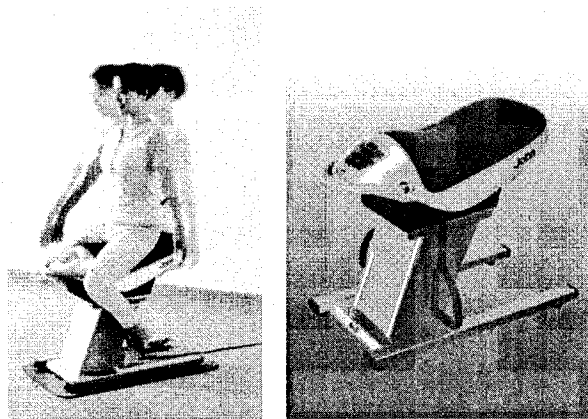
られています。

そして、乗馬装置さえ作られるようになってきます。



19世紀に製作された保健体操のための装置

-Zander, G., 1890から-



現代のフィットネス用「乗馬機器」

### 3. 専門領域「治療的乗馬」の成立



この領域が専門性をもつものとして本格的に成立してくるのは、1960年代以降です。特に、イギリスとドイツ語圏で実践的な検討や理論化が図られます。イギリスでは障害者のレクリエーションやスポーツなど、障害者の社会参加という観点に重きが置かれボランティアの育成法も含めて方法論が開発されていきます。他方、ドイツ語圏では医療（理学療法）の一部としての乗馬、心理的な対応及び教育の一環としての馬の利用、障害者スポーツとしての乗馬、というようにそれぞれの専門領域における馬の活用というかたちで方法論が開発されます。

欧米をはじめインド、シンガポール、香港、オセアニア地域、ロシア、メキシコ、などの障害のある子どもの教育領域では、馬を用いた指導はプールでの活動とともに必須の内容になりつつあります。

この領域の質的な向上と学術的な交流を目的に「世界障害者乗馬連盟」があり、3年に一度世界大会が開催されています。



## 馬を障害のある子どもたちの教育に活かす

—「治療的乗馬」の世界—

### 4.我が国の歴史



我が国において障害のある子どもの教育における馬の活用は、既に1970年代、東京都立町田養護学校が当時町田市にあった財団法人ハーモニーセンターのポニー牧場において実践を行っていた記録があります。この他にも、手元に記録はありませんが、恐らく教育における馬の活用はもっとずっと以前から行われていた可能性があります。

障害のある人々への馬の活用が一つの領域として我が国に紹介されたのは、1980年代の半ばです。八木一明氏が中途障害を負ったご自身のイギリスにおけるリハビリテーション経験から「日本身体障害者乗馬連盟」を設立し、各地の馬場を借りてボランティアとともに活動を開始しました。この団体はその後「日本障害者乗馬協会」と名称変更するとともに組織変更を行い、現在乗馬クラブ等馬事関係者を中心に特に障害者スポーツとしての乗馬に取り組み、パラリンピックに選手派遣を行うなどの活動を全国に展開しています。他方、これとは別に、ドイツの研究者と障害のある子どもの教育に関する共同研究を行っていた国立特殊教育総合研究所のグループが、1990年から障害のある子どもの教育における馬の活用に関する試行を開始しました。このグループの特徴は、障害のある子どもの教育に関する専門家と馬の調教の専門家とが連携して内容と方法論とを開発しているという点にあります。

先に述べた(財)ハーモニーセンターの活動はその後、東京都葛飾区が設置した「水元公園ポニースクール」に引き継がれ、東京都立水元養護学校教育活動や

個別の活動に利用されています。

また、「日本身体障害者乗馬連盟」や「水元公園ポニースクール」でボランティア活動を行っていたグループがイギリスのRDA(障害者乗馬協会)日本支部というかたちで東京、神奈川で活動を続け、現在NPO法人RDA Japanとなって各地の活動を支部として位置づけ、障害のある人々のレクリエーションやスポーツとしての活動を行っています。

近年、地方公共団体が関与して障害のある人々や地域の人々に馬との触れ合いや乗馬の機会を提供しようという動きが各地に見られます。宮城県は県立知的障害者施設「ふながたコロニー」にポニー牧場「ルミエール」を置いて全県派遣事業を行っています。在来種馬保存会のある市町村のなかで、長野県木曾郡開田村、愛媛県今治市は、地域の養護学校や小中学校の教育活動に馬の活用を推進しています。この2地域を含め、歴史的に馬と深い結びつきがある全国39市町村で作る「全国市町村ホースサミット連絡協議会」は1998年の大会で「乗馬療育」を推進していくことを公式宣言しています。東京都渋谷区は2003年7月31日にポニー広場を開設しポニー4頭で半年間に延べ約1万人の区に在住する子どもたちに幼児児童にポニーとのふれあいや騎乗の体験を提供しました。この他、各地で行われている障害のある子どもの乗馬活動に対し補助金を交付する市町村が数多く出てきています。

この他、乗馬クラブやボランティアが独自にたち挙げた活動が各地で展開されています。

現在、団体間の交流を目的とした組織として「全日本障害者乗馬連盟」があります。

また、県や市が障害児・者を外国派遣しているところ

るでは、外国での活動に「乗馬療法」を取り上げているところがあります。兵庫県宝塚市は、市在住の障害がある中学3年生全員をアメリカ合衆国コロラド州デンバーに派遣する事業を毎年行っており、このなかに3日間の「乗馬療法」プログラムを位置づけています。



## 5.我が国での課題

この領域は、実際に指導を受けた子どもの変化から保護者の反響が非常に大きく、いずれ少しずつ日本に広がり定着して行くと考えられますが、現時点での最も大きな課題は

- (1) この領域を取り扱う専門家が不足している
- (2) この領域に用いる馬及び調教者が不足している
- (3) この領域を展開していくための場所が少ない
- (4) 実施経費が得られにくい

の3点です。今後この3点が整備される地域で質の高い実践が行われ、それがモデルとなって全国に広がっていくことが期待されます。

## 【参考・引用文献】

- 1) Heipertz, Wolfgang : Therapeutisches Reiten Medizin, Pädagogik, Sport, Franckhs Reiterbibliothek, 1977
- 2) Kröger, Antonius : Partnerschaftlich miteinander umgehen, FNferlag der Deutschen Reiterrichen Vereinigung GmbH, 1997
- 3) 国立特殊教育総合研究所肢体不自由教育研究部：障害のある子どもの教育に馬の特性を活かす，国立特殊教育総合研究所，2003
- 4) Riede, Detlev : Therapeutisches Reiten in der Krankengymnastik, Pflaum Verlag München, 1986
- 5) Strauss, Ingrid : Hippotherapie Neurophysiologische Behandlung mit und auf dem Pferd 3., überarbeitete und erweiterte Auflage, Hippokrates Verlag Stuttgart, 2000
- 6) 社団法人日本馬事協会：馬のいろいろパート8 馬はともだち

(滝坂信一)